

は、魯迅に直接に伝えられたものではないと思われる。診察の状況から見て、トーマス・B・ダンは医師として十分に慎重であったと考えられる。

経歴について、まだ十分裏付け調査が出来ていない点があり、たとえば、トーマス・B・ダンの出生記録は、ベンチューラ郡役所にも、カリフォルニア州厚生部統計局にも見出されなかった。またサンタ・クルス高校の卒業生名簿に名前が見出せなかった。

これらの点を含め、今後、上海・カリフォルニアの現地調査を行うと共に、さらに検討を続ける予定である。

(福井県立短期大学第一看護学科)

『多聞院日記』に現われる風病の

検討

中村 昭

『多聞院日記』は室町時代末期から安土桃山時代にかけて奈良の一寺院で記録されたものであるが、記録者はある程度の医学知識を持った僧なので、その記述は興味深く、この時代の医療の実態を知る上で参考になる。

演者は前々回及び前回の本学会総会において、この日記に現われる伝染性疾患及び皮膚疾患・化膿性疾患についての検討して報告したが、今回は風病の範疇に入る疾患についての記述を取り上げて考察を加える。

風というのは漢方医学ではやや漠然とした広い概念である。基本經典である黄帝内経素問の風論篇を見ると、次のような黄帝と岐伯の問答がある。

「黄帝問いて曰く、風の人を傷くるや、或は寒熱となり、或は熱中となり、或は寒中となり、或は瘍となり、或は不仁となり、或は癘風となり、或は偏枯となり、或は風とな

り、其の病各異なり、其の名同じからず。」

「岐伯対えて曰く、風氣皮膚の間に蔽れ、内通り得ず、外泄し得ず。風は善く行き、しばしば數変り、腠理開けば洒然として寒く、閉ずれば熱して悶う。」

つまり、風は千変万化するのが特徴であり、寒の原因にもなり、熱の原因にもなり、麻痺の原因にもなる。「故に風は百病の長なり。其の変化の至るや乃ち他病となり、常方なし。然れば自ら風氣を致すなり。」ということである。風邪または風病の概念は時代により変遷したといわれるが、基本的には内経の説が継承されており、それから派生して脳卒中の意味の中風という病名も出現し、感冒の意味の風邪という言葉も現代にまで残った。

『多聞院日記』は中世から近世に移り行く時期に書かれており、その中で使われている風という言葉の用法は現代のそれに近いが、なお古い意義も伝えている。

『多聞院日記』で風のついでに病名は次の通りである。
風、風氣、風氣傷寒、風病、中風、耳風、頭風。

この日記中のこれらの言葉の用法を少し例示する。

「近日諸方老若違例多シ、殊ニ風並ビニハシカノ違例増

ス。」

「若宮神主、十一日ヨリ風煩、以テノ外ノ由。」

「風薬少シ服スル処、一段快然ナリ。」

「風氣ニテ一日平臥ス。」

「常光院去ル廿四日風氣傷寒、以テノ外大事。」

これらの例を見て言えることは、風または風氣という言葉で大体現代と同じく普通感冒を表わしている。また風氣傷寒というのが一ヶ所に出て来るが、これは流行性感冒か或は風から肺炎にでもなったものかと思われる。

風病という言葉は総称であつてあまり使われなかつたようであるが、一ヶ所だけ出て来る。しかし、これはこの時代の人のことではなく、平安時代の僧の説の聞き書きなので、この風病という病名が感冒を意味しているのか、或は中風のような疾病なのか不明である。

同時代人の中風の症例は多数記録されており、次のような文章を見れば、これが脳卒中のことであるのは明らかである。

「去夜、窪院中風ニアワレヌト、一向驗無キナリト。殊ニ再発ナリト。アブナキ者ナリ。」

「窪院死去、六十九カ。数年中風ニテ無音ナリシ。」

「昨日、竹林院中風煩出シ、半身ナエタリト云々。既ニ今朝死去セリト、四十九カ。」

「死スル時ハ中風ニアイ頓死スベキナリト。」

次に、耳風という言葉は一例だけで病状の描写がないが、病源候論を見ると耳風聾という名で突発難聴のような症状の記述がある。

やはり風というのは突然襲うものという観念があるようである。

頭風は次の一例がある。

「深宗ハ頭風オコリテ俄ニ吉野参延引ス。」

これも俄に起る病であるが、和名類聚方では頭風にカンライタミという訓をつけているので、偏頭痛のようなものかと思われる。

以上のような用例に検討を加えて、わが国の中世末期の風病の概念をいささか解明したい。

(神奈川県綜合リハビリテーション事業団七沢老人リハビリテーション病院循環器科)

ロールシャッハ・テストの起源と スイス精神医学史

小俣 和 一郎

現在臨床的に最も広く用いられている投影的心理検査法の一つロールシャッハ・テストの起源がユステイヌス・ケルナー (Justinus A.C. Kerner, 1786-1862) のインクのみ図版 (Klecksographie) にあることは、すでにエレンベルガーらが早くから指摘している。しかしこのケルナーの名はもとより、ケルナー自身の人と生涯に関しては一部の分野を除きわが国ではほとんど知られていない。筆者は近年フィリップ・レクラム社から出版されたケルナー選集 (Ausgewählte Werke, 1981) を手に入れ、医師としてのケルナーの人と業績とについて知り得る機会を得たので、この人物とヘルマン・ロールシャッハ (Hermann Rorschach, 1884-1922) との性格的関連性および思想上の類似性を指摘し、併せてスイス精神医学史という大枠の中でこの二人